

beatleg magazine

7



プログレッシヴ・ロック6
独占インタビュー 2012

GFF **Greg Lake**
Steve Hackett
Tony Kaye, Trevor Horn
Mike Oldfield 1973-1984



Keith Emerson, Greg Lake, & Carl Palmer
Mud 70s / Photographed by [illegible]
Remix of [illegible] / [illegible]





Greg Lake Interview 2012

グレッグ・レイク (Emerson, Lake & Palmer,
King Crimson) インタビュー
2012年5月3日
北米ツアー中のテキサス州ダラスにて

Greg Lake
U.S.A. May 2012

【聞き手】南原 一樹

現在北米を「Songs for A Lifetime」というタイトルでツアー中のグレッグ・レイク。

職業上のコミュニケーションを受けた親戚なワシントン・ポスト紙に関しては、今号でデビューした通り「音楽界の巨人」などという表現は、彼はギョーコでなければ、書き切れない。ワシントン・ポスト紙の編集者から、それを実際に体験するには、公演に足を運ぶしかない。だが、グレッグ自身が日本公演に身振りに乗り込んでいる。出来れば欧州ツアーの始まる前の10月に実現させたい、と心から希望している事は、強調して置く必要がある。そういう訳で、ここでは実現するかも知れない日本公演までの駆け込みとなるべく、グレッグ自身から直伝日本のファンのために様々なエピソードを語って頂いた。このインタビューに際し、私達はまず4月29日のクリアウォーター公演後に、楽屋にて打ち合わせをした。ただ電話で話すよりも、まず実際に会って、どれだけ自分が日本に行きたいのか直感伝えた、とグレッグが望んだからである。

楽屋で意気投合した後、インタビューは二日後の月曜日に決定。ところが翌日のジャクソンヴィル公演からグレッグの喉の調子が悪くなり、月曜の昼間は彼の声が聴こえなくなっていたのだ。その夜のクリアウォーターでのアンコール公演は、何とかが進行されたが、インタビューは本曜日まで延期となった。それでもどこまで彼の喉が回復しているのか不安であったし、再度延期もあり得ると思いグレッグに電話を入れた。彼は「このインタビューは私にとってとても重要なものだから」と、

なんと一時間待って全ての質問に答えてくれたのである。実際のグレッグは、やはり世界一流のスターとしての雰囲気漂う存在であると同様に、

とても人間味の溢れる紳士であり伝説のミュージシャンに相応しい人物だった。このインタビューでも語られている「ファンと音楽を通して共に生きてきた人生を共有したい」というグレッグの言葉に感銘は全くない。彼自身今回のツアーを心酔家しんでいるのだ。ここではそんなグレッグの心意気に応えるべく、出来る限り完全な形で彼の言葉を読者の皆様へ伝えていく。彼のショウの構成と合う様に質問を時系列的に整理しておいた事をご了承いただきたい。

Songs of A Lifetime Tour に関して

—— 一人にも、お元気ですか？ 喉の調子はどうなされました？

グレッグ・レイク (以下GL): ああ、御陰様でかなり良くなったよ。ありがたう。先日電話してくれた時も完全に声が出なくなっちゃったからね。幸ったよ。

あの喉は公演で治っていたでしょう？

GL: そう、でも何とかなったんだ。もう少しでキャンセルするところだったけど。ツアーで山歌歌っていると、昼間は喉が詰まっちゃっんだよ。でも喉になるほどそれなりに声の質も良くなるけれど、それでもかなりヤツインだよね。実際のところ今日になってやっと良くなったばかりだから。じゃあ始めようか。

—— そうですか。それではまず今回のツアーに関してお話を聞きたいのですが、こういった形式でツアーをするというアイデ

アはどこから得たのですか？

GL: 今私の伝記本を仕上げている最中なんだ、[Lucky Man] というタイトルなんだ。この本を書いている間中、私の人生、そしてキャリアに大きな影響を及ぼした歌の数々と内面する事になって。書き終えてみるとそんな歌が15曲ほど手元にあった。その時、これらの曲が自分にとってどういう意味を持っているのか判ったんだ。それは私が職業の首と共有してきたもので、この40年間を共に歩んできた言ってあれば旅路のものだって。それで判ったんだ、もしそんなオーディエンスと貴重な空間を共有出来るコンサートを開く事が出来たらどんなに素晴らしい事だろう。って、何故ならこれらの曲のどれかに縁の物語がある。想定の首もていつか夢の中の旅の物語を語りたいとさせている訳だからね。だから彼らと音楽を通じて様々な物語を共有出来る貴重なコンサートを開き、自

楽を演奏しながらこの旅路を今再び共に辿ってみたいと思ったんだ。『Songs of a Lifetime』っていうタイトルは私が考えたものでね。そういう事で、これは過去をまた辿り直す旅路なんだ。聴衆の目にも参加して貰いたい。ジョウに貢献するチャンスを持って決めたんだ。

— こういった形式のコンサートは余り前例のないものですが、上手くいくという確信はありますか？

GL: 最初に思いついた時には確信はなかったけど、でも自分の心の中ではどういふものになるのか見えていたんだ。というのものは音楽を共有するという事が前提になってたからね。私が音楽に囲まれて育った時代であって、音楽は共有と同義語だった。それがソニーがウォークマンを発明して以来、孤独な体験になってしまったんだ。ヘッドフォンで聴くものになってしまったからね。私にとってこのコンサートというものは音楽を共有する事、共に音楽を聴きそれに興じて試みる事にあるんだ。共有という行為こそが大きな鍵になっているんだ。

— 事実私も『Works Vol.1』がリリースされた際、五人ほどの友人たちと小さな部屋の中でスピーカーの前に座り込み、流れてくる音楽と対峙して一言一語に耳を注いだりする。

GL: それなんだよ。昔ビートル製のレコードを買って、それを家に持ち帰り友人たちと一緒に聴いたものだよ。それは音楽を共有する経験だったんだ。それがこのコンサート。私、聴衆室に向かかって演奏するだけじゃなくってね。それと、私がこれらの曲を賣いた時点で全てが私の所有物だった。でも現在ではそれらは聴き手の所有物となっているんだ。曲はオーディエンスの一部となり、彼らにその解釈によってそのを自らのものとしているだろう。彼らの人生における様々な思い出に響きやすくて個人的なものになり得るんだ。そうなる曲は本当に素晴らしい。聴き手それぞれの人生を彩っている個人的所有物なる訳さ。

— 失礼の公演でもそうでしたが、このコンサートでは基本的に貴方一人でアコースティックギターを弾いて歌うというやり方はなく、他どの曲においてバックアップが使われています。

GL: イース。

— このテープはどうやって製作されたのでしょうか？

GL: 各曲ごと違う時代に作ったんだ。自分ではもうのんだけど、一つ返えたやり方だったと思うのがこのショウ用に自ら新しいトラックを作った過程だね。例えば『Lucky Man』だけで、オリジナルタイタからバージョンを抜き取って、それを新たに作ったバックアップトラックに置き、その上は私のパフォーマンスを加えていったんだ。オリジナルタイタ、新タイタ、それにライブパフォーマンスの全てが一緒にになっているのさ。だからスタジオとライブ、それにこのショウ用に特別に準備された音楽がコンサート場において混合されているんだ。

— 貴方はマルチプレイヤーですって、それでバックアップテープでは新たに全ての楽器を自身で演奏されたのかと思ったんですけど、曲によってはドラムが打ち込みで聞こえるのよ。

GL: 曲一曲曲異なったやり方を取ったんだ。そう、僕が前の曲の音とおりの別のパートは私自身が新たに演奏したものだ。でもそうした本物の理由、それは私がまだ完全な演奏者だから。それだけなんだ。昔ながらドラムのパートを完璧なものにするには何時間か使ったまま取り組むなんてやうだね。普通の人たちはそんな事したがりないから。私一人で手掛けた方が早いんだ。深く没頭しちゃうんだ。それに私は自分の作る音楽を聴けるものにしたい。例えば今回のショウの為に私が特別に作った『Epitaph』が *Run Like the Court of Criminals* のモデルだったけれど、とても良い曲だし自費して売ったし誇りに感じているんだ。

— 僕がコンサートでも楽しそうに楽しんでいる。それと『Shakin' All Over』が楽し

しかったと思うんです。

GL: それは良かった！それはちょっと毛色の異なる曲なんだ。やるかどうかに限してはなかったんだ。多くの人は知らないんだからね。でも、テープが『Love at Last』で変わったし、私がやった理由と一緒だね。それが私が初めてライブを録音した。ジョニー・キャシディ、アンド・ザ・パトリックの曲だからなんだ。『Shakin' All Over』は彼らのヒット曲だよ。

— ショウの構成も第一部がキング・クリムゾンと初期の影響に重点が置かれ、第二部がELP主体となっていましたね。

GL: その通り。時を遡るように構成したからね。

— 貴族の成長期からキング・クリムゾンまで

— 初期の話になりますが、コンサートでもお話しした『Lucky Man』の誕生時、ギターを初めて手にされた頃の情熱の平タリストと言えは如何でした？

GL: シェッド・ワースのハンク・マーヴィンだね。クリフ・リチャードのバックアップグループにいたんだ。ハンク・マーヴィンは全てのアートプレイヤーに影響を与えたんだ。マーヴィン・ブローナーにジョー・ペック、ロバート・リックスやゲイリー・ムーアにさえいた。彼らはともにもジプシー・ギタープレイヤーだったけど、そのプレイはとても美しくロバート・リックスなものだった。私にとっても偉大なヒーローだったんだ。

— 貴方はオーカリストとして世界的な成功を収めています。どういふきっかけでギターだけでなくヴォーカルも担当するようになったのでしょうか？

GL: 時に思いついたんじゃない。まだとても若かった頃、アマチュアバンドでヒット曲を沢山弾いたんだ。そうやって数々のヒット曲を数多く歌って貰った。行っていたんだ。他のアマチュアバンドの事を学んだ。スティーブの曲を聴いては自分の事を学ぼうと思った。どうして彼がヴォーカルスタイルを変えている訳だからね。

— コンサートで貴方はザ・ゴッズは嫌い

ループだったと語っておられたが、それは後のユーライア・セプテμβル・オブ・ヘンズレスなミック・テイラーを尊敬していたあのグループの事ですか？

GL: そうだよ。あのバンドが嫌いだった理由はね。それが商業的な理由だけで存在していたからね。まるでミュージック・ランドの様なバンドで、飛び乗ってかき回すに飛び降りる。そんなものだった。バンド自体の音楽スタイルもなかったし、個人の曲をカヴァーするだけだった。ミュージック・セリフ会社が発行だけを目標に作り上げたバンドでしかなかった。そこには何もなくて、キング・クリムゾンやELPとはまったく別、誰も加入しては抜けるというバンドだったんだ。そう、ミック・テイラーも一時期在籍していた。良いバンドではなかったけど、メンバーの何人かは素晴らしいかった。君の言ったケン・ヘンズレイもいたし。

— プリティシッシュ・ロックスなならばゴッズの前は一度は耳にするのですが、音楽的に何と何も残っていないのが実感がよく分かったんです。

GL: レコードを作らなかったからね。ゴッズはレコーディング・バンドじゃなかったんだ。ライブバンドで、金儲けの為にいつもツアーに明け暮れていたから。私が参加していたのもそう思いっきりじゃなかったんだ。

— 貴方とロバート・フリップは同じギター教師の下でレッスンを受けたとか。

GL: そう。ドン・ストライクという人物で、アディ・ア・マーズと一族の生徒だった。ロバートと私はいつも一緒に練習したものだ。キング・クリムゾンに加入した時、ロバートと私はお互いの事を熟知していた。彼と私の嫌だったんだ。お互い顔の面で互い音楽を考えているのを見ていてたから。そういう意味で私ともほとんど無関係な関係だった。音楽の理解の仕方全く同じでは見ても聞かずにだんだんと、それは私達が互いに人間らしく音楽を教わったからなんだ。

— 多くの人がロバート・フリップは素晴らしい人間だと賞讃しますが、貴方が見て

はどんな人物なのでしょう。

OL1 ロバートは確かに変わっているけれど、それは私們のためにもなる事だよ。どういふ事かという。私はシグマのために自分らの人生において敵というものがあつた。これはとても苦しいものなんだ。ロバートはシグマで居ないで、善によって人間界という存在になる。それが私達の主な願いだと思ふ。それでも私たちが善を同時に理解していたし、お互いの善きものも共有していた。そういう訳でね。キング・クリムゾンの外側面でもロバートと私は完全に調子が合う事があるんだ。

繁栄のエマーソン・レイク&パーマー時代

—貴方はキング・クリムゾンのデビューアルバム以来、単なるミュージシャンとしてだけではなくプロデューサーとしてもバンド活動に関与してきましたね。どういうきっかけでプロデュースに関わるようになったのでしょうか？

L1: そうだね。単一の理由と言ったら、
 1. 日本を組織した際に私達は時間を置くこ
 となく即スタートした事はなかったであ
 る。プロデューサーを探してその時間なんて
 うかかったんだけど、事実数回数日でもレコ
 ディングを始めたことではなかったんだ。
 第二の理由は単純で、私がキースやカ
 ルよりもプロデューサーに関しての知識を
 揃えていたからだ。『タリム・ツング
 の官邸』を数回共同プロデューサーしていた
 経験があったから。だから1.5日か2日スタ
 ッドに入った時も自然発生的にそうだったの
 だ。話し合う事もなかった。初期のレコ
 ディは全てそうやって作ったんだ。

プロデューサーとしてどのアルバムを最も誇りに感じていますか？

GLはグループ、初期のレコードになるな、「ト
ビー・ジョー」、「恐喝の組織改革」、それに「タ
ルカス」みたいだ。どれもが独特のサウンド
と音楽を有していた。僕々に感銘された
食品で完全にオレリジナルだったんだ。でも
「Wacko Volume 1」になるともっとステ
ラに寄りかかろうと過ぎてかなり保守的になっ

ていた。ELAPとしての側面が消え始めていたんだ。あれが終焉の始まりだったな。

その見解は多くのファンが同意見だと思うのですが、個人的にあの「Works Volume」はプロデュースの面でとても成功した作品だと思うんです。

OLさん、確かに私も運く気に入っていた作品なんだ。収録された曲の真つと「Pirates」やキースのコンサートとみれば、にまぬらしい楽曲も含まれていた。でもあれはエルドの作品ではなく、キース・エマーソン、グレッグ・レイヴ、そしてカー・パーマーのそれぞれが独立した作品だったから。

——そんな状況下にあってあれ程の作品に仕上がった事実こそ、プロデューサーとしての貴方の手腕を如実に表していると思うんです。

GL: ありあけどう。

——「展覧会の絵」が2トラックのカセット
マスターにて録音されというのは真実です
か？

GL1本当と、あれはニューキヤッスルのシテイ
キールで録音されたんだ。仏語はあれを
ライブで演じて面白く始めたんだけど、あれ
んだけど、余りにも大きな反響を呼んだ事
に軌道自身とでも驚かされて、それこそ
ショックだった。それでライブテクを録
音する事にしたんだ、というのがすごく
ウットカ落ちるだろう。ウツっていいや
らなんだよ。数週間ほど演奏したの落すと
すつもりだったんだ。それで、自分達用のゴ
ビヤを作る目的で録音した訳だ。だからど
トラックの録音と自分の歌にだけ集中した

——それがどうしてあれほど良い音で録音されたのでしょうか。

GLはバンドが良かったからさ。って言うか、バンドが実際に始めているのが良かったんだ。それはビートルズに関しては同じで、彼らのライブ・レコーディングを聴いてみると常に良い音が出ているんだよね。それは彼らが良いバンドだったからなんだ。

同じニューヨークズル公演からは他の楽曲も録音されたのですか？

GL: 私の知る限りではないと思う。ショウの

残りの部分がどうなったのか、実は知らないんだ。でも言われてみると、私自身確かに後悔が湧いてくるな。残りの部分を収めたマスターテープはきつとどこかにあると思うし、誰かに聞いてみるよ。

失われた記録といえば、1972年の健康
国公演の貴重なビデオが二ヶ月ほど前に
88℃によって放逐されたんです。ご存知で
すか？

「レターマン、私は観なかったからねえ、勿論。コンサート自体はよく覚えているよ。素晴らしいショーだったし、日本で録画された夢を知っているけれど、フィルムは破棄されたって聞いたけど？」

それが今年の3月下旬にイギリスのBBCが放送したんですよ。40年前の日本における放映とは別のロゴを新たに入れたものを。という事はマスターはBBCが保管しているのでは、と思うわけで。

「うわ、又観る事が出来たらどんなに素晴らしい事だろう！ あのコンサートは本当にマゼニブ・セッションだったからね。」

—そういう訳で、この質問を送ってくれたライターから、出来ればBBCと談判してこの映像を公開し公式にリリース出来る目標にかけてください。と頼まれているんですよ。

し：勿論！ そう出来たら素晴らしいな。私からも試ねてみるから。

一方で、ELRPの初期におけるベースの価格はかなりリトリブルの効いたものですが、これは算術的にそうしているのです。

けにも知っているように、私はまぎやター
 と周知してこの店。少年時代からずっと、
 ひとつはギターこそが自らの音楽だと。
 ページを転向した時、現りのページス
 とは曲がフラットワウの弦を使って
 いて。でもそれは純く平用な音で、振動
 するものもある。いんたんだ嫌な音を出
 してたら、一足まぎやターと鳴る。こ
 りて。そんな見んだ嫌な音を出すのは
 じいさん。それで音楽店に行ったら、
 音が出た。音が、たまにたまに、たま
 に出た。たまにたまに、たまに出た。たま
 に出た。たまにたまに、たまに出た。たま
 に出た。たまにたまに、たまに出た。たま

アワラント(カウンドアワラント)なんだよってその強さを売りにくれたんだ。それを見て私はあ、これだ！って。私を乗っ取ったって思ってたんだ。トビーンと音がして、さうさう書になったんだ。でもその時のおさげで、アワラントにサブアンプというか、ローランド(廉価版)がなかった。それからトビーンと音が鳴り過ぎて聞えなくなったよ。それにあの時はベースアンプではなくて通常のギターアンプを使っていたんだ。今後はまたあのベースアンプがなくてはならないかもしれない。VOXなんかは初期のベースアンプを作っていたんだけど、あれも壊れた。それから私の場合はハイワイプを使ったと記憶してる。でももうシェン様にならと記憶が当たるスライムアウトで、それからアンプがたまたまスライムアウトや、マハのピアノから流れてくる音楽がみたい！って。嫌々嫌にならなくて。

— [Works] ツアーでは八弦ベースを使っていたのを知っているのですが、それも同様にテクノロジーが貢献したからなののでしょうか？

「音が素晴らしいし良かったんだよ。でも問題だったのは弦のテンションが強すぎたことで、最後にはネックが折れてしまったんだ。だから延長する楽器ではなかったね、でも音が良かったって聞いてるよ。折れたネックを直して展示してるらしい。音はクレイジーだったね。」

—その「Works」ツアーにおける巨額の負債がEL&Pを解散に追いやった、という話は正しいのでしょうか？

しある(笑)。「Works」ツアーにはさきも
落った様に、終焉の始まりとなった「Work
」アルバムを締めて行われたツアーだった。
オーケストラと共演するなんて夢にグァ
ンティティだったし、最高の現場ではあ
った。でも30万打の演奏を出してしま
ってね。それは当時の放散軸線からする
と物価に合わない損失だったんだ。まゝ今
も金には変わりないけれど、でもそれは
軌道によって成るおぼやらない事だ。
これにそういって喜んでいて、でも軌道に
あんなに、おぼやらないで、おぼやらない

書を尽くしたよ。オーケストラと共にね。
それが私達なのりのワァーのやり方だった。
あのワァーには140人もの人間達が同行し
ていたはずだ。1) 毎のトラックとクリエイ
ティブによって題材を転換させていたんだ。4
ホマーだけで2人もいたんだから。

GL: その通り。

それでもオーケストラとの大規模なツアーというのは、アーティストとしてキャリア上のハイライトと成り得る経験だったでしょう?

GL: ファンタスティックだったよ、本当に。

セントリョールのオリンピックスタジアム
みたいな会場でオーケストラと真にパー
ーマンス出来たのは実にワンポイントだっ
たし、一生もの思い出。やれて良かった
と思っているんだ。でも何度も言うよう
だけれど、あれがバンドの終わりの始まり
だったのは確かだ。まあ、あの時代自体が
終わりを告げていたんだからね。

——その後の「Love Beach」に貴方は全く満足できず、録音が終わるや否や帰宅してしまったと聞いています。今振り返ってみて、「Love Beach」をどう思われます？

GL：私は確かにハッピーじゃなかった。とい

作られたものはプロデューサーに得られながら、
 制作したものだとは思ってかんだん、あの当時
 僕はアルバムを作る意思なんてなかった
 のだけれど、あと一転作る契機があったか
 らね。それまで音楽の関りのペストは尽く
 しないよ、本当に、で、アルバムの一冊は自分
 で聴くともうそこに匹敵しなくていい。自分
 がいかに気分がわるいときの音楽ない事無理
 だ、というやるのが難いんだ、私にとって
 音楽が何が一番大切な言葉は、それが正
 直な言葉だ、魂から出てくコミュニケーション
 を見るのがには正直でないことはな
 らない、あのレードは正直な人ではない
 なかった、というのを私達の風が多少わか
 りたというは思いこい取ったんだね、ま
 んど言うは言われて、今取り返してみれば
 幾つか良い物があるとは思う。悪いア

バムじゃないとも思うし、ますますだね。
ただ石川戸のベストではない。でも当時は
あれが勝一杯だったんだ。

最高水準のミュージシャン達との共演

—ELPの活動にリソースを割かれたソロアルバムではゲイリー・ムーアやフッド・タンガンを加えて『Nuclear Attack』の様なハードロックが聴けた。あれは長年ハードなロックを歌う責めを聞いてみたいと思っていたファンには素晴らしいプレゼントとなったのですが、どうしてあんなに商業性になったのですか？

9L: ダイアリー・ムーブこそがその理由だよ。

私はホプ・ディランと「Love You (To Meek)」という曲を共作したばかりで、ディランに声をかけたらツロを弾いてくれなくて、って厭んだ。私がアビーロードでレコーディングしていたときにディランが入ってきて一鼓とはもめいらい成のコードを叩いて、ギターケースを抱えていったんだ。あの姿を私は一生忘れないだろうね。コントールホールでもお互いに弾きながら。彼はじゃあチューニングに専断するから、ってスタジオまで行って行ったんだ。チューニングの圖もずっとコードを書きまわして。それから、「何を弾いたらいいかアビイアを離したら全部グレインバグでしかないか」と言う方です。録音ボクソンをオンにしたならテープを回したんだよ。私はいつだって実験も兼ねて全てを録音しておくからね。それに併せてディランが弾き始めたんだけど、そのプレイはもう目にも留まらないのだ。彼の弾いたピアノの音は、いったらもう息を呑む程だったよ。彼は右の腕で弾いた事まで一度もなかったから、もう本音がでた感じだった。それで決まってる。たったの15秒であらうないんだ。今でもあのトラウマを軽く聞くたびに口が震える。それで私は「ディラン」は絶対に一緒にやるべきだ」といって、彼も「はい、俺も是非やりた」といって彼とディランに参加に込んだ。あのバンドには俺も本家らしいグレイプ・ウッドが加入していた。ジ・

ー、ラフアディやジョー・コッカーとやってたトニー・アイター(元MSG)とか、そんなゲテリーが持ってきた曲の1つが「Nuclear Attack」だった。それで私はあの曲をやったんだよ、それだけで。私と彼はギター・プレイヤーとしてもウマが合ったし、とてもいい奴だった。そうやって私は、

—このアルバムのプロモーションツアーはラジオ放送され、現在ではCDとしてもリリースされていますが、そこで聴ける演奏はどの曲においてもとても素晴らしいものですね。ある意味あのレコーディングが残っている事自体奇跡的だと思います。

殺しと有罪。あのバンドに参加してくれた情

が偉大なプレイヤー達だっただけでなく、全員が心と魂を込めてプレイしていた。素晴らしいプレイヤー達が全力で演奏しているのを観ることが出来れば、その結果はとても特別なレコードとなるんだ。

——しかしセカンドアルバム [Maneuvers] のツアーが行われた記憶は私にはないので、これはどうしてだったのですか？

^⑤もし：正直言ってどうしてだったか私も知らない。

せないだよ。何が起ったのか判らないんだ。多分ガイザーに僕の契約があったのかも知れないけど、悪い当せないな。確かにブアーはなかったね。

でもそれがE&L Powerに繋がったわけですから文句はないのですけれど。あのバンドによる米土ブアーは実に素晴らしいものだったと思います。私もメドウランスだけでは動き足りずMSGまで行ったもので

おもしろい。あれは実にいいバンドだった。あ

「アルバムはとても気に入っているんだ、
ジョー・パルマーとは異なるバンドだけどね、
新曲の進捗にあった化学反応が通っていたか
ら。フッドリーは素晴らしい奴でデイトなド
クサーだった。あのアルバムでは特に
「Miracle」という曲が気に入るんだ。
ジョー・パルマーのドラミングによってライブ
では以前の曲がかなりアップレートになりヘ
ヴィな音になったと思うんだ。」[Knite
Notes] や「[Farefare for Common Man]

どに特にそれが顕著だったと思うんですけど、カールと比べてユージーと演奏するバンドのサウンドはどう変わったと思われますか？

GLI 1 型の買った通り、そのままでよ、ある意

味より、グイになった。それは、コー
ジが「カル」よりも、エドワーズな
ため、よりロックするドラマになったか
らなんだ。カールの場合はもっとエド
ワーズだ。そういう者、実際、コージ
は前進直行するハードロック的な姿勢を持
た男で、それが音楽にも反映されたんだ。
——ザ・バフの「Good Looking Boy」のレ
コーディングはどうでした？ あの曲では
エルヴィス・プレスリーがテーマになっ
ているんですよね。

GL: そう、あれはエルザ・スの事を歌ったも

のだ。ロジャーとピートとは仕事をするのは得意だった。彼らこそが、フー・ナンバーならなくとも彼らがフーの生き残りの人々を助けた。というのも彼ら二人の間には今頃までフーの音が脈打っているし、それは一緒に演奏してみれば直ぐ判る事なんだ。それは本物のフー・ナンバーなんだ。だって、それによって足踏もいまよりウエッジンだね。彼らは弟事として最大な才能に恵まれているだけでなく、作曲家、コンセプチュニスト、パトリストとしてもグレイトなんだ。彼らとは仕事が出来たのは本当に素晴らしい経験だったよ。

再始動 ELP と制度への懸望

——90年代になり又EL&Pが盛んになってリ
ースされた『Black Moon』と『In the Hot
Seat』ではEL&Powellでの経験が活かさ
れているのでしょうか。

GL: それはないね。[Black Moon] ② [The other]

Hot Seat] はどちらも制作したプロデューサー側の視点から私語を語ったものの、
ら、マーク・マンナーの [Black Moon]
のプロデューサー] は偉大なプロデューサー
であるだけでなく私の友人でもあり、素晴らしい音楽の才能に溢れた人物だよ。こ
もあのアルバムは彼のヴィジョンなんだ。



物語が語られてから、グレッグに質問が向けられるのだ。この日はクリムゾンからEL&Pへと以降した経緯。1974年のニュージャージー州での電撃による公演中止騒動、『恐怖の顔面改革』のジャケットにも影響をELPとしての作品価値、インタビューでも語られたワークマンによる分断と決断、等々話が及び、最後にジミ・ヘンドリックスに纏わる思い出へと進んでから彼へのトリビュートである[Bold as Love]が披露された。その後、少年時代に始めてギターを手にしたクリスマスの思い出が語られる。最初に覚えたD、Am、E、Gというコード進行で初めて曲を作ったんだ、とグレッグが述懐し、同時にキース・エマーソンがどうやってこの曲におけるミュージック史上最高のソロを演奏したのかも暴露される。[Lucky Man]が始まると、グレッグはピアノの前に座り「People Get Ready」で静かに興奮を始める。アンコールの「Korn Evil 9: 1st Impression Part 2」によって、この3時間に及ぶコンサートは満足しきった観客の笑顔と共に幕を閉じた。

開演前の観念などまるで忘れてしまう程、当夜のグレッグのパフォーマンスは力強いものだった。彼の目指した音楽の共食というコンセプトは、曲に伝染のない他人を排除したアヘン主義者自身による4人フォーメーション、そして観客空間において意識的にコミュニケーションの活性化を促進す

る事、それらにより見事具現化に成功したと言えるだろう。こういった演奏側と聴く側の距離を縮めての意識共有は、これまでロックという分野において積極的に試された事が余りなかった。グレッグやEL&P、それにオリジナル・キング・クリムゾンに思入れのある観客にとって、このツアーは又とない貴重な機会となっている。長年UKプロダクトを愛し続けてきた日本のロックファン達にも、是非このコンサートを体験して頂きたいと思う（物論満腹が必要となるが）。熱心で献身的とすら言える日本の音楽ファン達にこそ、こういった機会がもっと考えられて然るべきと思われた。グレッグ自身、真実に日本のファンとの交流を深めたいと語っているだから。

(南條一朗)

<セット・リスト>

- [First Set] ■ 21st Century Schizoid Man
 ■ Send Your Love To Me Tonight ■ Shakin' All Over
 ■ From the Beginning ■ Hearbreak Hotel
 ■ Epiphany ■ The Court of the Crimson King
 ■ I Talk to the Moon
 ■ You've Got to Hide Your Love Away
 [Second Set] ■ Knock out Me
 ■ Still... You Turn Me On ■ O.A. Sabbath
 ■ Bold as Love ■ Chest in the View ■ Lucky Man
 ■ People Get Ready
 Encore ■ Korn Evil 9: 1st Impression, Part 2